



2.0.1.43

俳諧十編

伊地知

伊地知文庫  
文庫20  
346





文庫 20  
346



俳諧十論

附序

東華坊述

伊地知氏書冊

あるく〜武江の芭蕉庵より茶話禪と云録と  
 あるく〜吾輩のり林とあるく〜我輩の以雅と  
 ひめらむと文と論議の述而とあるく〜いね維十  
 の尚疾とあるく〜て世十論とあるく〜いね維  
 の例のゆ〜一紙と今や世向の俳諧とあるく〜に  
 其のまよ本の方あるく〜とあるく〜のち〜とあるく〜  
 有は〜とあるく〜に我ら俳諧とあるく〜好す〜と  
 あり〜とあるく〜例のゆ〜とあるく〜あるく〜の

十論

序



世にあらざる人かたしはくもるあるもの  
 おこふれはたしむるあり我ら人かたしはくも  
 かりくもあつたれあむはくもるあるもの  
 白金の要とおもふはくもるあるもの  
 けなす世論として著るはくもるあるもの  
 ことありきもあつたれあむはくもるあるもの  
 ありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 之種の真実とありき世論ありや私あつたれあむ  
 へくもる世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 ありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ

才一 沈潜傳



折る沈潜の傳とありき世論ありや私あつたれあむ  
 ありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 言行とありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 沈潜ありとや世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 ありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 ありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 ありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 ありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 ありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ  
 ありき世論ありとや世論ありや私あつたれあむ



史記よりかきぬと云ふ一評に太極のるところ  
儒佛老莊のむしより虚を言ふてはくぬ  
てくるを虚とせむなく一を孔子に在固ありて  
仁義とすといふ釈中に入達應ありて伊論とやゆ  
いつれは能治の機変をばらん能治をば儒佛と  
やうけとくんと詩音の媒とす一ちやゆが説お  
ま天の存摺よけんとゆくと伊安諾伊快冊の鵝鴒の  
喩より天照御神とくげはふおひく虚言の向に  
るといぬむむと猿田彦いそ等おしく天鈿女  
とてはるり言に凡雅の能優とされしちんえり

八中よりくに難波はの芥いそをとあつり浅香山  
の詞とて虚とあつふ二言葉とてもはあつ  
誹諧の名をた今集にありてはれより和音の  
一辨とありぬいとと能諧と誹諧とて音訓の論  
ありて八中御抄も二名とあきされ二条次郎の音心  
を述もけ風辨をふめあつて法式も新四の  
差ふあれは芭蕉の歌はよ人偏の能諧と  
用一と白馬に家訓の一條とてあつりて文明の比  
あつりて海の家法師とて世に誹諧の名あり  
守武堅一とされとてそのひて百病とけし子向とけらぬ



貞性良宗と云ふ匠の名ありてきし流儀の言謀を  
 世に知られしは貞宗と云ふをいふの事と詠  
 隅田川のほとりにてそ句の初めの流儀と云ふ  
 今の凡雅の振と云ふはいつし世のち雅のふ因  
 武城の檀林の額うらて流儀の湮ハチヤク不見の破らと云ふ  
 耳と言法のおしことわく眼と流儀のさしと云ふ  
 ちねいさしと云ふよてはありしことばありし  
 ことばありしと云ふことばの中よりあるに實に  
 その此の流儀と云ふを今様の人の好むしと云ふて  
 しくと連言する人も一々の所與といひて流儀の

ことばある人あれども流儀の心と云ふはありや  
 けりし流儀をいふも唐虞の先よと云ふても  
 旅川楚の後よと云ふれども和漢の二郡とありぬ  
 況やと云ふよと法と云ふも世法と云ふも教と云ふ  
 流儀の心を善悪は有りしと云ふも法然上人の言に  
 て流儀の神と云ふはありしと云ふも法然上人の言に  
 あひく善するの法と云ふはありしと云ふも古流の  
 神と自己の眼と云ふきて凡雅の心と云ふは  
 言と天よりうけりて自悟とも自證ともいふ  
 世より流儀と云ふことばに流儀といふは  
 臣實庵

一論上

三



とえ祖とある

傳曰一段と此後之根をもつて儒佛をのこる  
より子差万不の故あれとも屏もさるる虚妄の  
二ありに今や此後之るをとりて虚妄をあらふ  
仲をとりて蝶の二子と十論とけりて世法に  
附宜の二子あるよと信とへてさるる此後と  
誹謗の子論を古今集をも敷尾及て誹謗  
しとらむしとて此類とて。如きの法とて  
やうら米谷及て誹謗と訓とへて他行の論  
論もへてとてとて白馬の四十二法よりの

と夏の口傳ともやせもくなれり。伴が夏の末はして  
とえんは此地の董ろりり。そなきはは官とあるは  
洛の子子此後とすもあひく理本を書い  
朱点を加へる相二冊ありて佛をも意見の中此  
ちん連二子の新式を画雙より佛くらねり  
頭書し朱点を加ふ或は百人一書の秘あり  
或は右今の序付ありてをんをいれりよ七人  
の所あるうききききききききききききき  
後とて佛もとてさるるかて天和の抄あり  
武江の深川と隠道して此地や此後とて水の音



とぞる函雲の二句、自己の眼をひらき、さしり、  
の二をらひ、さしり、さしり、さしり、  
論をへ、史記の滑稽言より、心と伴て、  
ふひ、む、ま、と、今、と、  
新舊の名と、ころり、天、  
観、平、夏、の、八、九、と、ひ、く、  
あ、む、ひ、く、る、よ、  
中、の、  
貞、室、と、  
そ、と、く、と、は、り、む、の、り、

いさ、の、  
漢、や、け、二、句、の、  
多、よ、  
信、を、へ、  
才、子、傳、と、

才二能諧道

おも、能、諧、の、  
の、  
漢、よ、能、諧、の、  
一、論、二



矯俗の儼カキりあるに虚実の向ふとあたふとむと治  
 の詔カキと宗カキとある一やより虚実なる一もあ  
 不ら言借あるとやせよふ徳徳の長老の向ありと  
 ありと女眞向とあるぬ人のいせれとて花老のる  
 きらやんの大遊とえとて聖人の仁義と後世の  
 世世の是非とあつけし虚実のまじりあはるる  
 ともあるに徳徳を是非とあつらへく今世の世世と  
 あるはむねらると虚実の身代よあるは法と世世  
 の和説ははるく言と一字録のあらむはし時宜  
 此一法をききてもやあらむに徳徳のるるよ徳徳を在

の向と虚実と虚実の中庸のにありと、ふとあり  
 儒師の大るると虚実のどねよ家とよけるると徳徳  
 いたれつ仲人とある一はくはよはよは條あり世世の  
 人知をみ倫の常はしおしさを徳徳の名とある  
 けひとら凡礼の辨とある一人よりけことあるけを  
 ちよ千重の四難後とある一も厚一牧のさいとある  
 ちよ一八條の稟者とはくねと一輪の飲のたのこ  
 とかえとらふ世世の妻とあらうて美言よ耳とある  
 むる徳徳自在の人とよふ一とあるに徳徳の徳徳を  
 宗徳とあるし守節とあるはく徳徳の詞ひある



されども純潔の心と信へる人ありける吾等純潔  
 と古人ありさふよとひそくは行人にちやぶる家訓  
 の秘文とらあさるもりかたをいれぬの信託をと論と  
 じうの純潔よるといふまじうの純潔たるを  
 ちらといひむまにちの代々の撰集よけ純潔の心  
 ろくといふ純潔の詞の比喩とちらといふ純潔の心  
 の風雅<sup>の</sup>と信へるやいてや純潔の信<sup>の</sup>と信<sup>の</sup>と信<sup>の</sup>  
 ありやにありありと物の姿とちらといふ  
 それを信言と信託ととちれやと例の虚言の自在  
 例のちうく例のあられた風雅と、は余を述はのりあは

やその中の信人まを風景とあがり言は葉とあは  
 ちと信の信と信と信の信といつれと上よのあらあ  
 名人の場をちらといふ遠く人あといふ人といふ  
 ちらといふと、た知の如くは、まを人の信  
 あらふ信と万物のる信とまをいふ天地も信  
 変化をちらといふと、まをいふと、鬼神といふ  
 信と信とちらといふと、まをいふと、月と信と、  
 の阜華と信と、信と、人の虚言と、まをいふと、  
 儒術の信と、信と、人の信と、信と、信と、  
 上よと、まをいふと、信と、信と、信と、  
 上よと、まをいふと、信と、信と、信と、







て負角とてに骨よりぬ玉帛のれも勝とおもて  
決意や力とこととわぬ衣食の産しんとと  
ちして遠くを椎葉の糧とていし近きと木むしの沼と  
きりさるくそ日のみれとおもししやあし  
生海の計し似し後文のうとふもまへに例の  
く例のたししく能治と心のあしいちりとさむし  
たもやけるの功と論と儒仏老莊の虚言とあつひは  
連字の理とをくふく國よつとむるはあれあはれ  
子あつととき能治天下の一助とつとふしとたれし  
能治の人と宮所みややの事のみりきりあれ田舎の秋の塵

しかりりてユラユラ商店のあつとらよつとつと湯肆  
蟻房のあつとひよつとらうに世界よき術のるあはれ  
向上の一路とあやうよとほしひく人と損とせける  
ちんくんと益とせしけるちんくんと愛れとつと兵衛  
きりく人を誨しとて能治とをねのきりしと  
つとけ諾と我水の書込金とつとあつとの人れす  
過とつととや今とつとけ意と治とつとあつとつと  
おほくよめつとあなひやとあんに老く世の人とつと  
つとつとつとけ能治のつとあつとつとと塵言の標とつと  
世持の人知とつとつと也洋やけるの論祖ちりつと



人々の言を聞いてみる人のおもむきられたるものの  
金言と世に傳へて物の始と終とをさぐる中を人間の  
あはれあはれしてはしきけるの事地ちりすと  
傳曰今も此の流の二居るを極の二氣の動を物  
一虚妄の事あり或は神農の次女と云ふ  
或は黃帝の妹と傳へてさるるを史記より  
ね志ると中古の流流といふにそると論より  
今の流流よけるとわらうとこれと例の過當  
あつたると流流の頓挫と云ふ一けぬる白馬の  
説文といふにわらうた大言といふに耳説とい

そのまゝ傳へけられたる論の法ありて  
儒の傳へてきたるを流流といふに虚妄といふ  
一して老荘の流流と云ふは中流  
の流流といふと流流の大宗師と云ふ一けぬる  
の文章に六義の中流と云ふに流流といふ  
一して凡を流流一して物と云ふは雅を流流一して  
と云ふに流流と詩の流流と云ふに流流といふ  
の流流と云ふ一全ふに白馬の真言と云ふ一  
次に投子一説の流流の流流といふに流流といふ  
世に流流といふと流流といふに流流といふ











と性とおつふちよきも仁勇のひきあるとまらへりていれ  
そ智を二ありて世智を仁勇とおつふちり直智を  
仁勇とおつふちむたへい張る女児の扱ふにまらへり  
先と誠信の白馬孫と仁徳の仁と談笑の詔諄と  
いひ仁徳の勇と文章の頓挫と不智をいひ仁徳の  
機変と起りのあつんまらへり仁徳の風神をいひ  
詩と弁連弁ふらぬく詩と弁連弁ふ歌と氷の氷  
もまらへりていれ朱とつらまらへりていれ  
のまらへりていれと建立の二行とも我道の風骨とも  
也まらへり仁徳の一流とまらへりていれ弁連弁のみな

とまらへりていれといれの真全とまらへりていれ  
といれむらねらるねとまらへりていれむらねらるね  
いれむらねらるねとまらへりていれむらねらるね  
言語の書とまらへりていれむらねらるね  
全く善くしていれむらねらるね  
るいれむらねらるねとまらへりていれむらねらるね  
かりて善く書く善く書くといれむらねらるね  
あれともいれむらねらるねとまらへりていれむらねらるね  
さるもいれむらねらるねとまらへりていれむらねらるね  
といれむらねらるねとまらへりていれむらねらるね











はるいふてらふと御座の静よはるいふてらふと  
ふるの勤さるにさるもあらはるると世に直下北  
子なるも一は設下のはね人ありてきましく御家の  
御座とせしむるのまゝあつていふちなるの語とが  
きくしていふかゝるもくはるいふてらふと御座と  
御座とせしむるのまゝあつていふちなるの語とが  
湖南よの海とせしむるのまゝあつていふちなるの語とが  
たよむとせしむるのまゝあつていふちなるの語とが  
岐よとせしむるのまゝあつていふちなるの語とが  
まゝとせしむるのまゝあつていふちなるの語とが

と御座とに美言のこととまゝとて傷は両つのはさき  
を在る家のこゝろ言はしむるに後よりあらると御座の  
世はるの事御座のいふと御座のいふと御座のいふと  
とせしむるのまゝあつていふちなるの語とが  
てりおとあらとせしむるのまゝあつていふちなるの語とが  
用はる附句と附句との飛落とまゝとて御座のいふと  
御座のいふと一子一點の御座のいふと御座のいふと  
新ちんといふと一子の陰晴とまゝとて御座のいふと  
とあつとあらとせしむるのまゝあつていふちなるの語とが  
とせしむるのまゝあつていふちなるの語とが



て今日の世界にあはふ人と有性の師とあり子一とあり  
たりや御書の應接持物を老稚の和光同塵と論語は  
管窺親仁も畢竟と母性の人和りて和と温属  
の二ともさうさうなれども家の二心即ち下るるに二舞の  
眼力と作ふあるもさうなれども性よひぬすりの性  
文ともくかやうともさうして武あるんやも武ありて  
文あるんやも武と天下の治具あるもさうして我々の  
の子高達と才一と能諧のろと性ととあるもさうして二に  
能諧の法と式ととさうさうさうさうさうさうさうさう  
はさひ性をはり及りんものとさうさうさうさうさうさうさう

さうさう情と種と虚とて種と実あり一蘭省のものに  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
て漸めつ後のさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
の向と正法と性をさうさうさうさうさうさうさうさう  
はさひ一段と骨節ありてさうさうさうさうさうさうさう  
母性の温和と性と性さうさうさうさうさうさうさう  
さうさう能諧の内訖とさうさうさうさうさうさうさう  
又倫のわかれ親疎あるも利欲とさうさうさうさうさう  
公子の理論とさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
物と勝負のふあまとさうさうさうさうさうさうさうさう























有り無文化とあるも其れを志す所ん今や其れは虚家の先後  
と論とい虚家の先んは是非と云ふに故に其の先ん  
と自らあるも一も其れは其れを新陳と云けて金石  
のちきりに命とほさして彼を任うて其れを美あが  
仁義に好悪の要あると云ふ一も其れは虚家の先ん  
其れは其れも例に兩翼の用あれは虚家の先ん  
ふれ其れく其れは其れと云ふ一も其れは其れ  
虚家の先ん其れは其れも其れは其れは其れは其れ  
て其れの子と云ふに其れは虚家の先ん其れは其れ  
其れは其れ其れは其れは其れは其れは其れは其れは

有り無文化とあるも其れを志す所ん今や其れは虚家の先後  
と論とい虚家の先んは是非と云ふに故に其の先ん  
と自らあるも一も其れは其れを新陳と云けて金石  
のちきりに命とほさして彼を任うて其れを美あが  
仁義に好悪の要あると云ふ一も其れは虚家の先ん  
其れは其れも例に兩翼の用あれは虚家の先ん  
ふれ其れく其れは其れと云ふ一も其れは其れ  
虚家の先ん其れは其れも其れは其れは其れは其れ  
て其れの子と云ふに其れは虚家の先ん其れは其れ  
其れは其れ其れは其れは其れは其れは其れは其れは



と字のいく言の熱の表裡と志のわらわらにあり  
洋や虚実の認めと。正詁の真言とつづるの  
真言の正詁とつづるありて此と唯仰ふ所と  
多の眼の仰ふつづるの仰とつづる  
人もあつたつづるの虚の危つづるの馬の  
とを祖の論者と動して誠の正詁とつづる  
あれかの牛刀の戯とい詞の表裡のそつづるの例の  
多の地とつづるのつづるの文と。誠文の口仰とつづる  
志守やい論の執中と虚実と再行して居の二言  
とつづる。つづる一般者のつづるの智の二言とつづる

ひんちきつづるの叮嚀とつづるのつづるのつづる  
の遺書といつづる。虚居士の忠言とつづるのつづるに徳  
とつづるの仰とつづる。虚言とつづるの論とつづるの  
命とつづるのつづるの馬とつづるのつづるのつづるの  
法華と論語の要文とつづる。文武とつづるの虚の  
喜怒とつづるのつづるの針船の喩とつづる。つづるのつづる  
金とつづるのつづるのつづるのつづるのつづるのつづるの  
の勢の二言につづるのつづるのつづるのつづるのつづるの  
とつづるのつづるのつづるのつづるのつづるのつづるの  
我々のつづるのつづるのつづるのつづるのつづるのつづるの



才五姿情論

たし能諧の風波は情とて一辨に在今の差ふあれ也  
右風と耳とを後とすて言語の上の波とていふは  
今様と同じに言ふとていふ言語の辨は情と云ひたれ  
たし情のこぼれに言ふは波の論とていふは情の  
波ふらんや中後の言ふも波あれはとては情のこ  
あらしとていふは情の波とていふは言語の波の足  
こぼれに言ふていふは情とていふは言語とていふ  
本男木下より波あれの偏りを及ばらん今より言語  
の波とていふは情の波とていふは言語の波とていふは

の波とていふは情の波とていふは言語の波とていふは  
と波とていふは情の波とていふは言語の波とていふは  
地とていふは情の波とていふは言語の波とていふは  
こぼれに言ふていふは情とていふは言語とていふは  
たの波とていふは情の波とていふは言語の波とていふは  
秘訣も言ふらん言ふは情とていふは言語とていふは  
波とていふは情の波とていふは言語の波とていふは  
こぼれに言ふていふは情とていふは言語とていふは  
そは情の波とていふは情の波とていふは言語の波とていふは  
波の波とていふは情の波とていふは言語の波とていふは







よき差あり傾くはけりとも万ふありそとのくそとあつ  
連能とおあり一そらんとゆけともそら一能く本能に  
次あつりて能言連語の論と及らんやうと  
連言の能とあり能言の能とありて能言の能  
そよと能言一そら能言とありて能言の能  
いそらに能言一そらと能言の能とありて能言の  
変化とあり一そらと能言の能とありて能言の  
連能とあり一そらと能言の能とありて能言の  
いそらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり  
とありて能言の能とあり一そらと能言の能とあり

けあは吾言をく耳とあり能言とあり一そら能言とあり  
とあり一そらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり  
いそらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり  
人もあり一そらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり  
とあり一そらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり  
えと下果の能言一そらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり  
とあり一そらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり  
能言とあり一そらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり  
の能言とあり一そらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり  
とあり一そらと能言の能とあり一そらと能言の能とあり



詞を失りてとも或は母ののちとてしんとあるも  
耳とおとれりともまふてと言語の形容より  
又女子の麗るまをとりてあんなにや或は内儀の  
淑く然ら新古をとりてあんなにや新古を言語の  
よりありととりてと言ふは儒は非るをあつて  
も語は清く言連なりとありて言語の潔  
くも新古の體ともまふて言ふ也

傳はけし編を令く此體の備あり天地の文のまね  
より君か父の徳をとりて儒は又女子の徳を  
あらそひく畢竟は連能の淑く然とありて

況や言語の淑くあり耳目の明の差ふて言ふ  
るよあつて言文のまふて物言可啼の信あり  
て人と傳へ傳へて言文のまふて言文の信  
まふてあつて温故知新の言文のまふて言文の  
師の教を言文のまふて言文のまふて言文の  
これ眼とて言文のまふて言文のまふて言文の  
詞を言文のまふて言文のまふて言文のまふて  
連言のまふて言文のまふて言文のまふて言文の  
言文のまふて言文のまふて言文のまふて言文の  
言文のまふて言文のまふて言文のまふて言文の



才六能諧地

たも能諧の地とつた<sup>△</sup>狩め<sup>△</sup>うう<sup>△</sup>と幸地といひ傳地  
うう<sup>△</sup>下地といひ<sup>△</sup>うう<sup>△</sup>て合様の能地といひおあり  
節といふおあり曲といふ中の垂おありん<sup>△</sup>た<sup>△</sup>く<sup>△</sup>傳  
のた<sup>△</sup>る<sup>△</sup>も<sup>△</sup>勸善<sup>△</sup>懲惡<sup>△</sup>と地形といひ<sup>△</sup>仁義<sup>△</sup>礼智<sup>△</sup>に  
王城の儀式とな<sup>△</sup>く<sup>△</sup>久<sup>△</sup>殺<sup>△</sup>泣<sup>△</sup>血<sup>△</sup>婦<sup>△</sup>亡<sup>△</sup>女<sup>△</sup>に地獄の所おと  
所<sup>△</sup>う<sup>△</sup>い<sup>△</sup>ぬ<sup>△</sup>上<sup>△</sup>仰<sup>△</sup>の<sup>△</sup>説<sup>△</sup>法<sup>△</sup>も<sup>△</sup>世<sup>△</sup>間<sup>△</sup>の<sup>△</sup>耳<sup>△</sup>と<sup>△</sup>お<sup>△</sup>と<sup>△</sup>ぬ<sup>△</sup>う<sup>△</sup>  
七<sup>△</sup>寶<sup>△</sup>の<sup>△</sup>萃<sup>△</sup>嚴<sup>△</sup>と<sup>△</sup>七<sup>△</sup>日<sup>△</sup>う<sup>△</sup>て<sup>△</sup>何<sup>△</sup>の<sup>△</sup>曲<sup>△</sup>も<sup>△</sup>な<sup>△</sup>く<sup>△</sup>節<sup>△</sup>も<sup>△</sup>  
あり<sup>△</sup>阿<sup>△</sup>言<sup>△</sup>と<sup>△</sup>十二<sup>△</sup>年<sup>△</sup>の<sup>△</sup>骨<sup>△</sup>折<sup>△</sup>あり<sup>△</sup>た<sup>△</sup>る<sup>△</sup>擬<sup>△</sup>誘<sup>△</sup>彈<sup>△</sup>陷

の<sup>△</sup>口<sup>△</sup>教<sup>△</sup>の<sup>△</sup>次<sup>△</sup>才<sup>△</sup>と<sup>△</sup>感<sup>△</sup>と<sup>△</sup>一<sup>△</sup>し<sup>△</sup>う<sup>△</sup>を<sup>△</sup>論<sup>△</sup>語<sup>△</sup>とい<sup>△</sup>お<sup>△</sup>お<sup>△</sup>の  
徳<sup>△</sup>家<sup>△</sup>の<sup>△</sup>文<sup>△</sup>言<sup>△</sup>に<sup>△</sup>と<sup>△</sup>く<sup>△</sup>な<sup>△</sup>る<sup>△</sup>人<sup>△</sup>と<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>つ<sup>△</sup>う<sup>△</sup>海<sup>△</sup>流<sup>△</sup>の<sup>△</sup>お<sup>△</sup>く  
や<sup>△</sup>る<sup>△</sup>助<sup>△</sup>語<sup>△</sup>と<sup>△</sup>ぬ<sup>△</sup>く<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>け<sup>△</sup>り<sup>△</sup>も<sup>△</sup>吾<sup>△</sup>人<sup>△</sup>め<sup>△</sup>ぬ<sup>△</sup>と  
才<sup>△</sup>入<sup>△</sup>て<sup>△</sup>塵<sup>△</sup>空<sup>△</sup>の<sup>△</sup>言<sup>△</sup>とい<sup>△</sup>お<sup>△</sup>と<sup>△</sup>又<sup>△</sup>七<sup>△</sup>宝<sup>△</sup>も<sup>△</sup>過<sup>△</sup>は<sup>△</sup>ん  
は<sup>△</sup>く<sup>△</sup>く<sup>△</sup>節<sup>△</sup>の<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>う<sup>△</sup>ん<sup>△</sup>も<sup>△</sup>我<sup>△</sup>家<sup>△</sup>の<sup>△</sup>言<sup>△</sup>と<sup>△</sup>ん<sup>△</sup>猪<sup>△</sup>搆<sup>△</sup>今<sup>△</sup>  
あ<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>一<sup>△</sup>て<sup>△</sup>例<sup>△</sup>の<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>も<sup>△</sup>能<sup>△</sup>諧<sup>△</sup>也<sup>△</sup>節<sup>△</sup>を<sup>△</sup>家<sup>△</sup>の<sup>△</sup>骨  
う<sup>△</sup>て<sup>△</sup>一<sup>△</sup>る<sup>△</sup>建<sup>△</sup>立<sup>△</sup>の<sup>△</sup>た<sup>△</sup>う<sup>△</sup>と<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>と<sup>△</sup>一<sup>△</sup>今<sup>△</sup>や<sup>△</sup>は<sup>△</sup>つ<sup>△</sup>い<sup>△</sup>  
言<sup>△</sup>とい<sup>△</sup>つ<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>う<sup>△</sup>も<sup>△</sup>地<sup>△</sup>と<sup>△</sup>お<sup>△</sup>お<sup>△</sup>し<sup>△</sup>て<sup>△</sup>其<sup>△</sup>の<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>く<sup>△</sup>に<sup>△</sup>る<sup>△</sup>  
あ<sup>△</sup>ん<sup>△</sup>か<sup>△</sup>り<sup>△</sup>て<sup>△</sup>も<sup>△</sup>能<sup>△</sup>諧<sup>△</sup>の<sup>△</sup>地<sup>△</sup>と<sup>△</sup>つ<sup>△</sup>た<sup>△</sup>う<sup>△</sup>り<sup>△</sup>俗<sup>△</sup>談<sup>△</sup>を<sup>△</sup>た<sup>△</sup>  
と<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>雅<sup>△</sup>俗<sup>△</sup>の<sup>△</sup>所<sup>△</sup>い<sup>△</sup>と<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>と<sup>△</sup>例<sup>△</sup>も<sup>△</sup>塵<sup>△</sup>空<sup>△</sup>の<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>つ<sup>△</sup>い







詞作のいのもう一編うらもめかかんまらねい能作も  
世法とんふれも物の節くも候式をとり言信  
日月の三物あどよりて。撰集を所く多く天下  
の人よ業をねらとめりはましくも曲節とほらさひり  
能作の地もまらねい地のさる低よ自在なねい一子  
一言よ金銀のありありて好まの者の身同とおひら  
けらむやけりれもさかると一あもさのふくい地  
十年の孫背あんに彼ふんぐの能作と論一たの  
縮ともそあへて天下の絆をよ難とほけて難  
とほくありくよ能けんけ地と解さかまのあしんと

い儒術もく恒心とくもそれるのふりてんよ  
ゆゑにさあさ。お也かあさ。我らの能作昨の能作の  
何のめらりや君と臣とあひけ父と子にあき  
まら妻よひういえれ才とやてかふるまをまのこ  
いさきん能作をあらもくも今日用の放埒あん  
とく非もあらひ人よもたらしてはねよ人間の地とふ  
るよとあさる命

傳曰け一筆無名人間の常りてそれるるが地と  
ゆやあらんけあよ奇人連弁に業して自行の  
放埒とあけささる能作一箇の能勝地あり



と信を一に諄に蒼巖阿言の二教より地とて流  
とありて四子に蔵經の次第をいふる論語ハ  
少しくよ助辭とありてつれもその虚言をいふら  
ざる例の儒佛よあむるに例の文章にまやち  
まやあると論語の隠微なるより一節の  
ちうと居る諄に蘇門の二脈より多とを言ふ  
よ看過まんとを圖にま豆とかきあつた  
洪達<sup>ホンダツ</sup>うにま二篇とある驩龍<sup>ホンリウ</sup>頷下のいふと  
はくしてはねる人向の地は徳川<sup>トクヱン</sup>へまやま  
つた父と男女と此二つをれ交の三まよとて  
昌牙

明友の六偏と言ふるそと雖又圖の文はし  
りや

才七修行地

おと徳僧の修行とてまるとあつて房はせむ  
より儒佛のまよも修行とてまるとあつて  
こをゆかりとてまるとあつてまるとあつて  
あつて虚勞の隈<sup>クマ</sup>とありあつてあつてあつて  
媚人とあつて徳僧の虚閑なる曠<sup>クワン</sup>中<sup>チュウ</sup>より弱を  
たつてあつてこつとあつてあつてあつてあつて  
まよとあつてあつてあつてあつてあつてあつて











ありけりこのあまにま近の追剥ありてなるを  
 却字の子細をわのちう一才とうと韻字の初傳と  
 切字の右今のところの傳授とやんまるとはうとて  
 けやぶよりねとおろろろ人を信んとおうて言々  
 今部をも剥られちやま言語る即あげうははは也  
 まね修り地の治事とりやう十幸往く附いしを  
 人けく一十年還る附いしをたえくしてた  
 うらるの馬車り一けぬふとわる附いし年の  
 功とばいしる能借のよふとらふ(うせまに能借の  
 知と不知とと論と十幸のりい論もなるは十幸

の上よとあるの下よとも場とおあ一様にあるい  
 馬とこの大なるおのい車とこのふふとありし能借  
 一白の摸およりりて或は打却のいふはかりの或は  
 一折の附いしちういく程くと附合の变化あるに  
 上よとあるやういしと下よとあるは  
 一いふにやういふ様を十幸の始と終とあるの物だ  
 一あふうあふとを十幸の始と終とあるは  
 の物だよくらうと明暗のちうはと通ふちうとも  
 口よあふとありちう一まに上よの下よに始と終  
 の上よとあるはとまらう一いふは初めの訓信



唐よりたゞは種に不肖と之りかくと能信の俗徒を  
従くも還しもおふミナる然ちらに居りてな里の  
能信よありざるを二子の婿たるの未だんと齋の頭  
扱はよとてぬく我内よ入金くは

侍はけ一段とふの指子よかりて例よ能信の格  
より歎の海のわよに帆とあげるの林の言に葉  
よ花とけりよとけり今様の竹神もぬれと  
まよ雅俗の大よりありて十段の中此変化と  
を篇と世間ありある眼よの能信と  
て七尋八を夏のはやとつちなる古人も言と

帰去来とも帰京隱坐ともとりきり今此論者  
の二字録とくらしく我京の能信の字力けり  
辨りよもよもしく俗徒の語の中より能信の  
凡流と人よあらし世法の二ると世よばり何  
と今今の曉とちきり時宜の二灯とかけ  
つるにわくはけ論の親切と記さんや書ありあけ  
一篇と十論の中のなかむして又まよのまを  
つら中よもあら我の駒の形者より芝生かくれの古  
といふてふの二字にひいよをさるこふと鎖詞の  
格よてそれよのな里のる節よはる冬とかく























起造と合せしむる耻の二字は例の教坊として律を  
記造の論語ありけりやられし記造異典の言  
ふてはよはるむじてるふらこあらん人の我家の  
まよしよと流るる如く如何くともとるん  
あらん

才九変化論

此も記造の变化とて世法よ今日の内なるして万物  
の不定とゆへくせとせ文のちり付を天地の垂りて  
雨ふらりひぬよつかりまをと蒼とけりし秋をまじ  
ちれふさちりけり人間の变化よりして君をかくして

はとありけり父よなむおろし子にまじりしはあはれ  
の世にあらひりやんお即の垂りかありむ変化と  
天地の流るちりをおろくく人めあはれ色まに  
記造の变化と偏るおちりり物と古今の流る  
まろきちり物と一はりの垂りせはれむし記造  
の始中流のことりし新のまろく麗とまろきれら  
例の流るして雅ありし今記造を始流の二口傳を  
りし中に凡雅の情とあきりけり一はりの垂りし  
全く附合の流るして百初とまろく百をあるはり  
はれし附合の流るしやとまろく降るしやあはれに







一々の趣向とありてこれとよ句の語ともよ句の語とも  
紙もさやけぬよ喜ぶるも趣向とほしくもはと  
七五箇の一條とあるのほく一々の趣向といふ句  
の作ぬともんあつねといふ句の言便よくと辨りて  
我句となすと一附あねの喜ぶるの語も二傳足のかたも  
二句の間よんゆるといふやとていふ語と連言と  
て上よあやると下にゆめるえ下にきくぬと上よあやると  
ゆめるの和音り上下とよめて一句の作まるとおもさるとや  
今とよ句の語とつらと一句の作とやちと世とあね  
このよと終よ喜ぶるもともんあつねとありていふ

さうと附言の語もなりとて言に一分の趣向といふ  
の語とよとあると一附あねといふ語とありくと  
人倫のちよにて士農工商のよらとていふ言福の言  
ありとあるの語ありとて賤の言とていふ言とていふ  
衣裳の模様も方帯の格構もよ句の言わとていふ  
やとていふ言もよ句の言わとていふ言とていふ言  
とらとていふ言とていふ言とていふ言とていふ言  
はともいふ言とていふ言とていふ言とていふ言  
百納とよ句ありとていふ言とていふ言とていふ言  
紙もさやけぬよの語ありとていふ言とていふ言







け附きしを先はねほの論あり中より能備のあはれも  
其を其集の正史よりつるありきとてあつたの指しあ  
しつて大なるあはれし其意をあらはせしめんとあんにあは  
し高人と執向をいへりて損きつりよ思ふに句を  
はくねり高人を先はねほにへて思ふにあはれあつた  
ありしのはねとまうりてあはれ入るの次第とて入る  
へしとるに世間の附方を先はねほに思ふ者とあはれ  
めや句のたつりし高人もあはれにへりて思ふに  
先ねの程を思ふとまうりてあはれあはれの思ふとて新  
あはれにへりあはれにへりて思ふに先ねの思ふにへり

ありて思ふに能備の能備とおはれりし一も難むに附と  
いふ句のたつと起るといふ指し附を諸路のたつて  
宗因の向し今の次第とてあはれ思ふに思ふに思ふに  
しつて頼政の思ふに白河のたつて向附といふに  
い有る附の中れあはれとまうりて一側の手廻し人ありて  
人偏のさへをやうなるともあはれ思ふに思ふに思ふに  
あはれ思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに  
向附の法ともあらゆりしあはれ思ふに思ふに思ふに思ふに  
ありて思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに  
と句のたつりし世間を思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに



さるる例の字もひとも誰とこれに妻飯の附を  
或を從階のこあともりあれんよのほの附方コナタ  
より彼アナタ附とをえと老僧よりて大なるむくのけを  
向附ととりあせられと高人も老僧もおあ大なるおほ  
あうふのと大なると勤うとありほの詞と下のおほ  
こら入るの詞とお向とほあきて彼ら有心の佛を  
へねのち主人の從信はけしらすら附やのあるまに  
赤蓮のほちのむつうにねらおそめ大なるをわけて佛を  
と海島社のものりとりとんらおあふおよおとむむつうほら  
向附の佛とんらへへお向とあゆとと常とあひ大らね

あつ用のあはし附はから毫末の差ありてまに從階の  
ゆゑ不ぬと信とへへゆゑお向より情と起とて  
連座の人の妻化とさうと結れい又向も又向もわたり  
て人のあやのこやうへへ伸れい又向も又向ものほら  
風景からあんにまへへ村邊の日光とさう田中の松の  
あつちさうと附さんまうお向の情と勤うて佛を  
孤と化されくやらと附るにねらとあのおつちさうと  
する詞のあやと中うらうして世にけ情と扱へまら  
いふと起情とをりるせまねら向附を操む時の用  
うて起情を伸る時の用と知へへむくを真き式



とはらりて御音といひ走りといひ鼓音と云ふことあり申比に  
 東華式は八那の附合あり今うと十論の如きとありて  
 附合の名は五あるも附合なきは七名  
 八那も之法の中此御音とあり申一況や百韻の百音  
 ありんち附合もそれと付にふく一しれされ連歌  
 も此音も佳名を各句に付ふられと各句に太極  
 の一氣ありて一應よりありて一實よりありて一  
 たりもあく理もあく一法もあく式も  
 畢竟を信の二字より一も場を名人と初ん  
 て正子のよほを論と云ふに及んばも此音

の二まといふと神宿ありて枕とかいむげも  
 ぬ遊山歌水人との抱ふも一應言の如しと  
 ふよ言れと神方のるむと他人の理をたは  
 他人のる理を神方の理をもちて論理に  
 行人とあり一語ありとく先より一の中の法とあり  
 先より一又偏の法とあり一第一に言ふも鳥獸の  
 名とあり一風流ありといふ風流といふと一  
 といふ言れとこれと此音修りの人とあり一  
 一も席よのらむ射を衣食に一日の操業とあり  
 て一も山を奉山のまおとあり一をこれの風流



附合の之法を切じうるもなりし又群十辨の細注  
より切つて凡例の世分ふのふり初念の意向よ  
きくふくは好まるとその社会としてあるは時  
の不運あるを二虚実の虚実とていへば十論の  
究竟之言の变化ありはれども一元の調子ある  
穀とてやくとをあるはくは元法とていふ  
人の右轉を旋とていふは元法とていふ  
と此はむら付を氷の刃とていふは元法とていふ  
ゆるの切割とていふは元法とていふ  
孫の文武の母ふりて凡十論を切つて脚注とい

とあるかへも我らの字意達んる即の足る  
世法の附合して二虚実の变化のり世法のめわ  
あれは世法をふのりふいあはるゝとて世の  
におとらうされとせし

傳曰世段を好む世漏りて人天の变化は哀未  
とちいふるなり儒師の教あるを言ふ世法の  
機嫌をあるはとて世法を言ふとていふ  
百韻の变化のめちりて法は名のよあおら  
きとて師の孫よと一念の变化とていふ  
九十刹那の分きとていふも一念の足るは悪



と言ひしる。言に文章の公道を稱、言に能讀  
 の世法と信を成んや、はまらるる。能讀の附と  
 ありしもの、要あれ、才一より有る附といひ、才二  
 才三といふも、次といふは、才三の即歸一の入るに  
 りて、これら文章の論も、何れも例の能讀よ  
 りあるといひむ、成る能讀の古今と論して、新  
 の論を、めあれとも、邦終の二、三、不、會、底、の、今、も  
 あらん、言に古今の、言、文、と、呼、と、い、  
 「始」又、言、の、一、「中」後、ち、の、言、や、  
 「終」は、ち、の、言、  
 「始」古、池、や、  
 「終」録、お、こ、む、水、の、言、

成れ、世、れ、を、ま、ぬ、め、あ、る、言、の、能、讀、の、は、と、を、は、く  
 と、い、は、し、る、人、の、言、へ、ま、情、を、成、す、と、い、つ、こ  
 の、言、と、い、は、し、む、今、の、能、讀、の、ま、と、を、お、て、中、に  
 あり、一、言、情、と、ぬ、と、も、な、れ、と、は、い、す、の、餘、情、も  
 文章の優、劣、も、も、と、ち、あり、今、や、其、六、二、と  
 其、一、と、と、評、と、い、儒、師、を、ま、と、を、は、い、し、く、て  
 律、美、と、い、つ、ある、と、教、誡、と、い、ひ、は、ち、ま、り、其、中、の  
 一、と、お、て、畫、去、よ、あ、ら、ふ、と、風、雅、と、い、ふ、言、や、  
 風、雅、と、教、誡、の、論、を、張、子、る、ま、り、書、室、銘、よ、あ、り、と、  
 破、愚、と、訂、禮、の、所、見、ち、ら、と、雜、一、東、西、の、二、名、の







守りたりとてしんぐ世の連音此格とくらのぬりて  
まゝのちをきとまゝぬい何やらすりたるあり  
たれらると同意とて等執ともいふいと向馬の  
類説よけ方の論ありまゝぬいその見事と  
此格とい色のいふをとりしめて随向の中此一辭と  
あつり盡かすよの各の文法を始り起格と向附と  
いひたぐす中と括子と色まゝと両向の對とつらと  
殊よふの二名と細注と一を隔向の錯綜と  
双園の法も倒おまの格も向談の長短も諸路の軌  
ととも毎ぐ此向の志とて盡かす一け段の不可思儀

い才一の條句とて坊梅とほげとてよのよはひ  
編りなするともや言ふ此格の虚言とほり言に  
十編の信偽とてとらさくや又や論語の侍師  
といふて曰民と又偏の二句とて真觀群怨の  
口意とほり言はんはとて向馬の文章訓と知心の  
一字よりの通遠の二字と辨りて畢竟と身歎  
中木の用あんとする言に才一の詞とて礎碑  
の法もえうたありて海峽の口訣とるにせり  
ぬ一し洋よけ段の畢竟とす要方化も期とて  
よりの大とて有心附のふありてたれと



ふいそ鳥も新しく既居よつれの父母も古く  
新古も今日日の変化にして作者の情もさう  
せむもいづれ借のふ束と兵家の刀法よれと  
うも世ふ鬼答う「世と情あるも神家の  
ふ段と覚束あるもあつむまに氷刃の二句  
とて世論と看破さるる世に世を  
世情の和とあつむいづれ二論と人ふ世  
とあつむて借をさうさうの遊あつむ  
涅槃の二字不説らるる論とて世を  
のころあつむ

才十法式論

世も借借の法式と連なりの家に入あつむよ  
遠渡のさう合も神木鳥獸のまきつむも一  
一句の物と二句とあつむ七句ちり物と又句とあ  
又句ちり物と三句とあつむ三句の式と二句とあ  
よとあつむの中より「世と典の掟もさうあつむ  
あつむとあつむいづれとあつむとあつむとあつむ  
一やとと二やとのさういづれとあつむとあつむとあ  
一却の式と百韻とあつむとあつむとあつむとあつむ



貞徳の御筆より理木に斧とつれ噓仲に種を  
ひびくこころも今もまじくおぼれしも  
いふもめあふくかれせぬよと一かはのぬ異あしむ  
とやしくや終句の切字より眼の韻字も才この  
よ余はも哉と来との和訓を分む様と元と此  
さ題といふ指合を何のちちや去嫌と何の故  
ちのやとむ八月と消りあつらん我をぬきあはれ  
とも能指と何のあふれとけ式の名子いれ  
もあそもあといふとさうつらとめいふ言下に  
まゝく——その論議は夫詩のや——も君父のたから

うて熟本の名とまねとる多識の三子とすう  
詞のまねとすむううふあといふとあむ  
遠くと儒師の字向も近くとはの書も  
博くそのいへともいふとあむと  
かへつと耳く耳く耳く耳く耳く耳く  
あふららららららららららららららら  
我を我といふあう何のあう何のあう  
まゝのあを一人もあ——まゝのあを  
まゝのあを一人もあ——まゝのあを  
二あうとまゝもまゝもまゝもまゝも

論議  
一







も口車にこそりけるやんのみおもむき言ふすれども  
ある物あり附句にすれ難とある物あり詞のこゝろ  
も物のまきしむも帰よまきしむ人もよれり  
中らりとうちもはり新事のわけしむとねとあや  
時あり右式のわけしむとねとあや時ありねと  
おちやげの私しむとねとあや時ありねと  
は知とあやしむ人も信ありしむとねとあや  
はしむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあや  
名とよひあやしむ人も信ありしむとねとあや  
しむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあや

之をとあやしむに妙と信の二より入れし能得もあや  
有性の仰ふしむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあや  
とねとあやしむ人も信ありしむとねとあや  
古人の詞の中らりしむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあや  
宗匠の體ぶるも親しむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあや  
こぞ二應の自在とねとあやしむ人も信ありしむとねとあや  
時その勝方をむしむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあや  
い賭物とあやしむ人も信ありしむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあや  
ありしむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあや  
しむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあやしむ人も信ありしむとねとあや







野駭といひ祖録より子疑一法といひこれくを  
儒御の心記として下忍のくをいひてやうに教化  
の人れ大秘ありありはれやむく此流流るる流言は  
といふ判ありませを例の難いとせしむる連言  
の輝身といひ控されいさる眼ももてはれ今や  
我々の流流るる流言のくといふ物をあれと流流の  
詞といふ物とありませといふ流流の辨とはくく一  
洞といふ物とも連言と流流の流流をふあり流流  
我々の流流るる流言のくありませ流流の辨ありとも  
流流の流流るる流言のくありませこの流流と

あらけりといひ新式よなきの信訓あり言は雅言といひ  
俗語といひとらしむ流流のく用ちるにむありといひ  
ととそれる流流といひこれに流流のめいとありといひ  
流流のくの中流言も流言もいあるものにはありといひ  
それる流流の有むといひて目流細と結せはくんや  
せしむる流流にくきく人の点を流流十國十色ありといひ  
流流るる言もありといひあらありといひそれる流流の  
人といひて世中の流流ありといひ流流は執るものといひ  
宗近の流流とよくありといひ連言の洞子といひまといひ  
流流といひ真名といひ配といひありといひ流流の

十論  
七







こと言ふやねらうしき記譜のきと味とまらうしきと  
 ある時よなるの戯あり論語の精<sup>シラケ</sup>らひいよはりて  
 名とありてそのと例のあらひこそはれし<sup>一</sup>厭<sup>二</sup>と  
 志のあらう文意の優うらむとありてさきに雅俗の  
 ちういとまうの子成文質の論ともあらんはて新式の  
 郷食礼よこ席と一汁二菜にこそ茶とたんと  
 かさりあるおうしきめ茶物よ氣とほまきや卒その  
 結構よやうと一酒と二献よとへうしきとあら  
 漢や茶人の時さらし記譜の供給とあらふより  
 ちよふはと待とゆるは席一待わくは時<sup>三</sup>時<sup>四</sup>

一おとさうのわくはんやとまらうしきのあらひ  
 郷食の軽うんもあらうしき候約のあらひあらは例の  
 採むしに例のあらひうんもあらうとまらうしき世に  
 客を向といふても昭とるあらひいふてうら  
 へうに客向と客の信よめくまは中もあらうしき  
 詞のあらふとあらうしき一服とるまらうしきの佛よめくまら  
 あらうしき客向の余積と調あらうしき服の約字  
 けは市よまらうしき一せまらうしき茶の茶をあらうしき<sup>五</sup>  
 とらうしきあり世名の記譜の儀式とらうしき奉納追善  
 のまらうしきを客向の作者(まらうしき)とらうしき一知と







論一宗匠もとのつらゆちりたむじ一句「直とも  
出右遠近とも世教を古式よ五條ありて今も  
記さるる及りてさるる能清の席を傳さる才一  
世教の人和とてありて論語よ温厲の事とあり  
才二を談笑の風俗よありて閑雅よ哀平の頌  
とあれや能清とてその陰晴いひくくあり  
おも一時の妻ありて我々の能清の能清を  
能清のよありてありて能清とせし何のあり  
法式とせし何のありやとせしとありてあり  
論とてありて一平話の中の風と推とてありて

も能清も今人の戯りて一能清もとのつらゆちり  
ありてありてありてありてありてありてあり  
もんとてありて能清とせしありてありてあり  
とありてありてありてありてありてありてあり  
傳曰世篇を全く我家のはありて能清の式も  
ありてありてありてありてありてありてあり  
ありてありてありてありてありてありてあり  
何のありてありてありてありてありてありてあり  
所謂とせしありてありてありてありてありてあり  
て五條のありてありてありてありてありてあり



一社の説とてつゝもたも目に三場の機持をねらふ  
いひおよませまへてくもほいさうよ通す

香園をあらぬ神のまゝに

わらう萩の 風花のまゝに

世向をそひの祈折とて同秋の七向同ちるに香  
園と月の階かゝるれ萩と神風の威風と  
らふ志くれも次の神よむつとと例よ遷之の  
香園と木のたに月影と金くれりてまゝに  
月とつ子そらりてちて

八月を旅おりるよ小幡綿

これと一社の名譽ありとても此よちるは  
我々の太藤生とつれのをれを此香園とて  
おぼえりば店もあねまをふ近のふおと  
つりけぬよ一社の説とてなとほくの條目を  
おとすやと公私の二子に措浩とてまに一太の  
虚言とておれんや善ありおけ段よ風花の運ぶ  
詞と向馬よ祖の常語ちりはるを黄門の  
家訓もるの真加とつひる運とて風推の詞  
の須便あつて能浩とて例の神勝地とて  
次は執事のふおとて假名とて真名との配と



但けりもむ法ありに東華式の文格より我輩  
 の書法とをあるに連寄るおほく假名と  
 りらりて能借るおほく真名とをわかれ書  
 と真名との別あり上下の連続のらわらば  
 時ありきとて右にや録といひ水の音のき  
 込水の音に陰ありに録といひ水の音とを  
 勿論して真名よかぬあるもあれそ  
 り時をいひぬむ水の音とて用ひのまよ加ふ  
 らぬの心や大和の風解して假名と假名よの配  
 うの通用とをいひてせしめけりてフにへの音韻も

イキニクの取置横も芭蕉門の假名遣とて真字  
 亦の一條とある例の口傳とをいへばむいりり  
 物のは式とるをたてりて時をいひていりり  
 あり古傳のあやまりと用ゆるものあり何の故も  
 まれぬありたれと故實のはとそれら例の  
 師とていひていふをきくひる言の二法  
 ありん書やオニの條同じ能借の量とをいひてい  
 るに教化の大秘たりて傳りていふを孫言といひ  
 老言といふと富言といふ況や傳書の二層實  
 自在ちりみよ余やうとていひて方便説をいへ



に指月の喩をまゝいふ言に仇潜の用と可謂とを  
 ちんまをちや才との條目に二つのれ即ちいふは  
 おに人和の温厲あり今と云ふ私の言は  
 け法の私曲といふもあつる言に十論の公道を  
 多に十論の公法とすのいふんやこれと百世の  
 五條同とまふ一いふは我々の文道たる徳の  
 二篇よふ文とあつるは式の一篇よふ虚をかきあふ  
 先より虚々の説くして漢人ふの事と云ふ  
 け十論の實息と通してけりや仇潜の言と  
 よつれく天下に横説め置説と一云ふは儒の

の言教とくも忠信の教い諸道のほなりして孔子  
 道と文行の学にありかくするの言ふと云ふ  
 之象のそと地と云ふ人といふは所かそれとも  
 ちんまをちや才との條目のまの地よりして言易の  
 人のあつちやんまをちや

ちんまをちや才との條目のまの地よりして言易の  
 才一と仇潜と詭諧といふは古今の差ふある  
 ちんまをちや才との條目のまの地よりして言易の  
 と云ふ才一と云ふはのまのこにこそ其の  
 仇潜の即ちと云ふ其の二に仇潜の言を竟と云ふ



才に強ふらば極をりぬりて流るる連音のみあかし  
と云れざるものげまてゐるやうにやるる連音  
の極よ及つたともて用をぬくに能滞をせむ  
るやうにしてゐる理を極とに善悪のこを  
こけきんける世はを後たうて法家の理論  
を推しんやまゝにこゝれぬ極といひて家の  
一節とてゐる言を我家の凡音うて、醋吸の  
こ聖も然識の要文あらん子あらん能滞のた  
とあり文章の法格とあらうとあり或い上も  
の下よふ極く下よのらよに能滞とてゐる言に

六藝のむ極とあらうて或い言語を口舌とらう  
詞のめやに病とすこゆら言に能滞の接垂と  
あらうて或や中おひとの言子も能滞の二行と  
なりけるる言とてとあると信とらんやけとて  
もあるといひらんやとあると今かの時と後  
世はとけくさる言とありやとありと十論  
の極向とてあはれ始りて極とて儒師の両道と  
能滞といひて法家の二行と功とありとこれ  
と能滞の論語ともいふと能滞の法語とも  
いひて能滞の二行とる言とを極とて能滞の法語と







首領の一言とあり世とおもひ近くら音書  
ハ代集も浮橋の詞とありて、  
音書ありき。今や十論の譯者として  
言に論者の大功と任を傳へ、木鐸の喻を  
あつと例に能讀のおしこむ。佛家の龍樹  
も菩薩のたとふべく、此の論師とあり  
うらや

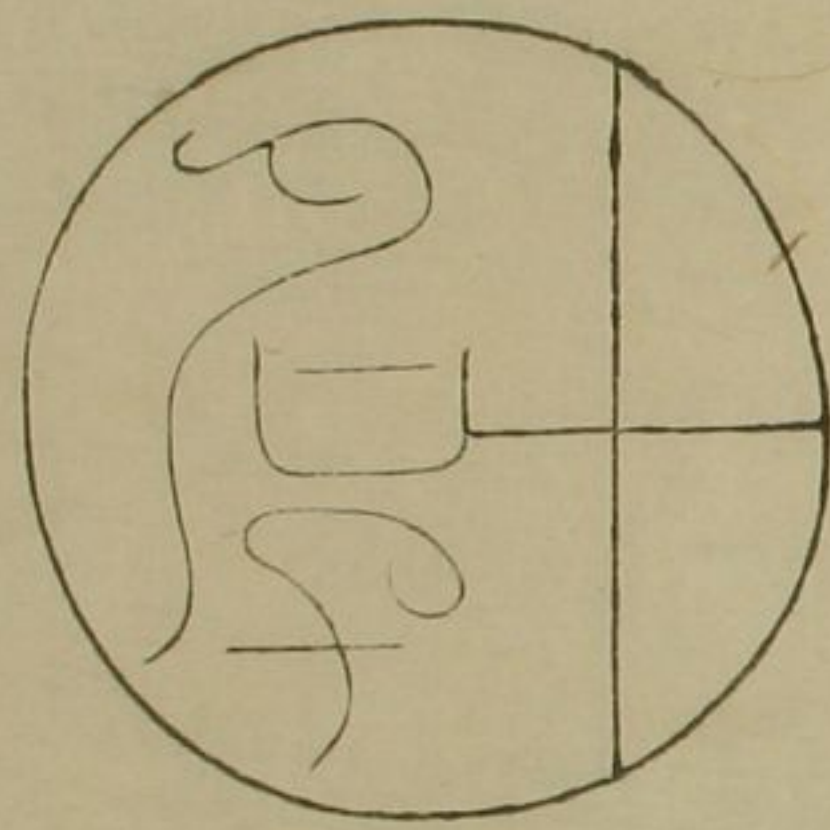
十論護

我向此十論者、和漢傳、滑誓之心、而勸之  
擬論語之凡論、些微之微、維摩之彈呵、歷  
諷不文、而可、字質、而可信、耶言、則謂、佛  
語、之論、語矣。若夫、介道理、與理、屈而所謂、  
物、于先後、之序、此名、為出、我家、之發明、而  
四、民、麼、可、遊、此、理、了、則、六、藝、麼、可、講、其、序、  
皇、矣、尤、憶、老、嚴、之、次、弟、則、仰、麼、宣、給、觀、法、  
先、後、以、智、分、別、居、來、其、經、者、為、護、出、世、之



泉乎。乎。此論者將說世情之遊厚哉。多知  
 所謂佻諧之和發儒仙而詩身之媒意乎  
 爾有則他諧之一道者不為子仰子子儒  
 乎實老在揚墨之虛乎常知虛實之變而  
 將設今日之世法。爾者歌人麼不隔。卧猶  
 之床乎連身麼不辛。子鳥之友乎。次安者搆  
 文武之內而情者為同。蒼鳥之道矣。假令  
 為虛於其實了。其不可為實於其虛與者  
 遇名庵居士之遺言也。則其言也何。不有  
 善要其以祖翁之令授道也。則是以先師

之為記法也。止今也。憶選場之時節。則祖  
 翁之滅後之十年。而殆可遂此論之功。而  
 傳其道之德矣。夫此故再撰此十論。而令  
 成和漢文操之別錄者也。享保己亥之歲  
 林鐘晦日。獅子庵蓮二爾申。





十論校

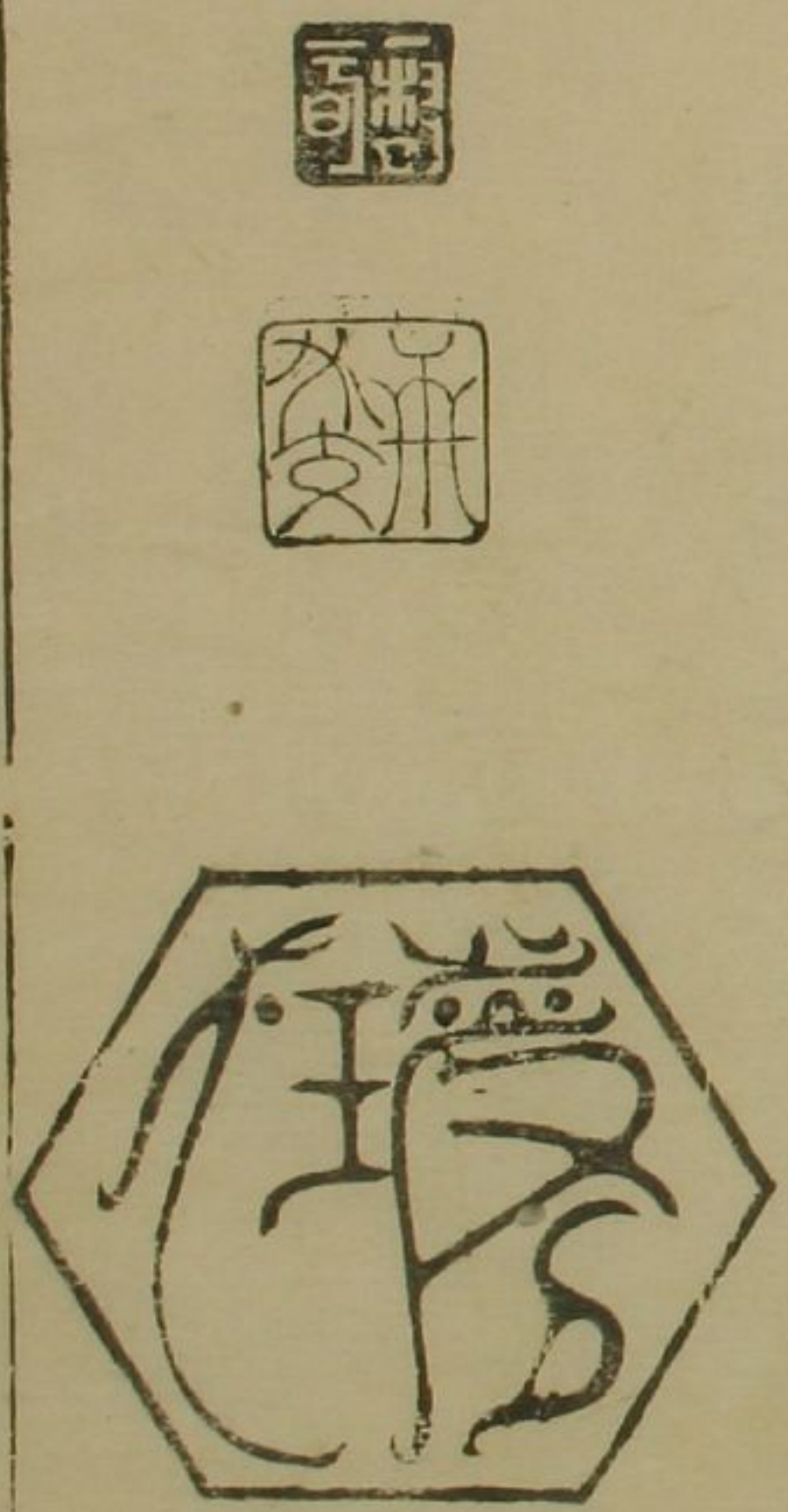
例のつゝ種子庵より十余州の遺稿ありてたれり中に  
 又秘の傳字あり今つゝ十論もそのひらきむら  
 武陵の芭蕉庵より祖翁といふのと論 終つら  
 え祿のほくそとすゆれり芝師の奥みより抄あり  
 庚午の丙午年ありて一書にその比の事あると  
 點検とらんに血馬種と一字録とを祖翁と芝師  
 のお撰とすありやあり十論の評者とも物言春三  
 といふ者をもその比を深川の庵よりて世論の評者

の派 かに今一向七中一書をそとつる名言の抄と  
 ありてそのちの名と評とをたれりを竹林の撰集  
 の時しかくのこく此後人附とるる一とありて今篇  
 の評とるるにわけらるるに傳の秘よりとらるる  
 室難の合にちありて後詔と傳曰のこまことと  
 られと十論の次才と授とるる才一と和漢の鑑  
 以心傳心のあるありと伝信のこまと取と評  
 の評のたれとありとるる才二才とるるをと評  
 て天下に文武の二助とるる言と傳書と評  
 りて治國齊家の理とありとるる才三才とるる



の玉論ありて虚言を化借のこゝろに傳仲いふと  
 りて人とおとみしを存せざることをあはれい  
 りてそゝるを修むに姿を文章のよるをちり  
 けり才六の言に物を一節のちりて信る才七  
 才八も地りて化借をきく事話あはれしはれ  
 雅俗の品あるより文章に鼓舞のくふやうあり  
 又美弦の術ありて多に儒仲の氣と轉り才九  
 化借の用ありて變化を天地の化れりて迅雷疾風の  
 冠りし及び鬼トモミツ拉那とあり才十も才十一も  
 あり才十二も新曲のきくもとる二才の詠ひ自序

才とけりてこれに秘めおひたをあたさる  
 志をたれ才十一も才十二も物のまはれ化借とけり  
 詞の虚言を文章とあつて一字一語のまは  
 たりれりむむ西のいひ論と措き化借の自さ  
 面と照してぬ言をさるるもくも色あはれ  
 文章のよる文月のみめ人渡起ねるけり





十論解

十論之奧書也。此論者粗紡副墨而可  
惑前後之相疑。泉共阿翁自加結。口  
之筆。則今將不忍。改草稿。我後及子雲  
之論也。則二亡子其惟察之。實度者。此  
論之故事。與古語。則皆々々。引儒仙之  
證。矢然。中有論語之詞。了者。謂儒書  
與仙經之多。非矣。乎謂擬論語之凡論  
矣。夫不其心在茲。耶。人。早等。仍解。

序文解

史記評林崔浩曰言出口成章詞不窮竭是滑稽之吐酒或  
滑稽曰諧語滑稽知計疾出或曰多智圓曲之貌也或曰優美談笑  
類俳優之能諧雜戲也解云此外贊詞教多アリテ本文三散在  
述而篇 論語述而篇述而不作信而好古在焉此於我老彭朱注  
述傳而巳作則創始也維一經尚疾品居士彈呵仙  
十才子之解云世一對十論中文字字上教誠下二樣了六  
多三文教ノニ子ヲ用ニ論語ハ文字ノ先ナルヲ知(キナリ  
世四子ハ祖翁ノ常語ナリ尚ノ書ノ熟語ヲ知ラス或ハ釋録  
ニ臘月ノ扇子ト云テ奇書ニ及ノ炭檀ト云レ何モ通用ナリ  
△桃紅李白古詩桃紅李白人間豈獨枕空樽忘世情  
△口金 史記張儀傳 受口銜金積毀銷骨  
△生任異滅 仙經三十四相ヲ云テ人天ノ間ノ變ヲ云レ三三年月ノ變任ナリ



才一段

家語諫者有五第一諷諫二勸諫三降諫四直諫五詭諫  
唯度主而行之吾從詭諫平公論語ノ注ニ詩経ヲ評  
スルニ凡論ノニ子ヲモ用ユ詭諫ハ俳諧別名ヲ世情久和知一キリ

詭諫 莊子仁義之端是非之塗櫛然敵或曰何揭仁義者數年鼓而  
來ニ子正季ノ老子大道理有仁義ノ空ニ内集達之ハ以心傳  
心ノ不立文字子或曰今時講得經論以爲佛法者愚人也解云此  
一對ハ法ノ虛空ヲ道ニ廣狭ノ論ヲ云リ十段ノ評ノ何難有若千ニ見合ス

達磨 一對ハ法ノ虛空ヲ道ニ廣狭ノ論ヲ云リ十段ノ評ノ何難有若千ニ見合ス  
詭諫 詭諫向者浮橋ノ詞ヲ以テ連音ノ始ナリト云ル詭諫アリハ鴉鴉ノ故古スハ

天浮橋 日本紀ニ出タリ或曰猿田彦居道迎百王孫而配侍神不  
得相向天鈿女同勝於人宜往向之鈿女乃露其胸帶  
於膝下而笑囁向立解云此段ハ金ケ能優ヲ以弱勝強ノ謂ナリ

八雲 古ノ序ハモのハ云ハ十二文字ノ好ク或モ取捨法ノ有リ  
帝の内好あり後香山の詞ハ未ダク載れり云々  
八雲ハ折ニ俳諧詠等ノ九品アリ眞實抄モ此端アリ夫詠諧ト

詠諧 云フ折ハ如何ナル云フニ有ラ正キヤウ知ル人トシ公任トモ不之  
道俊ト心得タシマ後拾遺集ニ是ヲ入ル拾遺云人詠諧等ニテ  
殊更ノ西心サモ被知トアリ解云詠諧ト詠諧トハ左別ニ我内ノ傳ヲ知

白馬經 俳諧白馬集ニ西産ノ遺經ナリ篇同ハ十二條ニ分チ題等ハハ  
家白十二字經ニ效ヒテ白馬東來ノ意ナリトフ全部五卷ニシテ  
其中ニ貞享式ニ系アリ獅子庵ノ遺稿ニ五秘傳トハ此經ノ中ニ  
散在セリ又章ノ類ハ論語ノ教誡ト凡論トナリ

芥子園 神社考ニ神尊ニ重中奇幅而袖向挿梅卷一枝則指矣仏鑑  
釋ニ明美抄ニ法然ノ夢中ニ金色ノ僧アリ云我ハ大高ノ善導ノ和尚  
ナリ沙正路ノ化尊退轉スカラスト解云此一對ハ屋ノ中ニ漢土ノ

法然 法ヲ傳ヘ玉コシ祖ヲ自ハ自己ニ角悟セシトナリ  
論語夫子葉不子而亦何常師之有或曰之人行必有我  
師正子ハ私云七人師トハ何レノ全又ニヤ尋又ニシ

七人師 師正子ハ私云七人師トハ何レノ全又ニヤ尋又ニシ  
云夢 上林賦ニ吞下石雲夢者八九其歸胸中曾不蒂矣  
怪自中 極廣也

才二段

一字錄 此録ハ東華坊所述ナリ篇目ハ孔子ノ家語ニ效テ或ハ意ヲ取リ  
或ハ詞ヲ取リ全部ニ系ニシテ其中ニ東花式一尺アリ多ク  
ハ月老ノ嚮リ新田ノ式ヲ付ヒテ一座ノ詠ヲ出セルナリ全部ハ俳

諧ノ法ヨリ時宜ノ変化ニシテ構ハ佛仙老ノ之教ヲ合シテ或ハ  
内人ノ編集ヲ難シ或ハ注者ノ按排ヲ難ス又ニ達ニシテ莊周トニ  
俳諧ノ骨似タ尼物ノ様達スル支ハ諸家ノ向雅ニ勝タル由ラ云











△**四葉** 白氏文集南首卷時錦帳下序山雨夜草庵中△字鏡錄加四葉  
明曰君詩飲即往遠許之一日或酒鐘而擗眉而去△虛堂  
四葉取筆起舞倒明南鐘鼓眉

△**誅木** 淮南子堯置敢諫之鼓舜立誅謗之木任欽諫者  
論語君子而不問或曰知和而不知不和之不可行也或曰顏回

△**和同** 能信而不能及子張能性而不能同或曰回也曰回也知愚  
或曰可也其智不可及其愚解云十論八本三論論語凡論二效

△**之遊** 戲如朝等所謂遊世於朝庭向者何必深山高屋之下  
真州岩城ノ郡主内藤家ナリ先祖凡餘軒ニ夜歸集ノ撰アリ戲

△**高家** 露沾公淺布別在トフ但此詞少子識之ト云家語ノ文勢ナリ  
論語孰謂微生高直或云醢季乞諸其隣而季之任所狂也小

△**乞醋** 富直季大笑解云此喻長裡ナカラ飲食小事ヲ類セシナリ  
才口改

△**虛實** 解云此二子ハ解語ノ大事ニシテ虚ヲ先ニ實ヲ後ニスルハ諷諫ノ和ヲ  
節スル存ナリ然レ儒仙先後ハ假リニ其家ノ内題ト知キナリ

△**馬** 與起行經仙九十月合馬馬中各我因地誘公曰鬃頭沙門正應  
馬妻不應之良此月膳之供論語夫子之武城弱弦子之

△**牛刀** 夫子偃之言是也前言戲之取解云仙ノ家若ト儒ノ虚遊ト知ヘシ  
法花經南權顯實或曰南方便門ヲ示真實相論語子絶四母意

△**顯實** 母必世固母我解云馬妻九十月苦ヲ受タル仙法ノ實ニシテ因ヨリ知  
牛刀ニシテ子ノ戲ヲ設タル儒法ノ虚ニシテ方便ヲ知レ況ヤ孔子モ微生高

△**母固** 難セラレテ非敢存信疾固也ト季ヨリ虚多ノ時宜ト云レシ  
而人モ卷矣相応あり明月記勉ヲ新有今の卷ニヨリト云レシ

△**名實** 名ハ新勅撰百人百と撰とあり也交ねるのりハ身及のれ也  
△**婦姑** 莊子室盈无虚則婦姑勃發注勅撰争闘也

△**忠言** 家語良莠苦於口而利於病忠言逆於耳而利於行  
△**虚舩** 莊子方舟而倚於河有虚舩未舩舟至有偏心之人不怒

△**天堂地獄** 禪錄天堂易遊地獄難入

△**大学序** 朱子之異端虚無寂滅之教其高過於大学而與實

△**大学序** 朱子之異端虚無寂滅之教其高過於大学而與實



△明德新民 大學注 明德者人之所得乎天而虛靈不昧

△欽金南史不容耳於欽之誘 孟郊詩惟當金石交可交與達論

△屬居士 編年通論屬居士德死依 襄州牧于公騰曰但願

△唯佛 唯佛經唯佛子 唯佛能究竟之解云矣 虛妄ノ虚妄トハ馬更

△般若經心經節要此等天旨アリ 畢竟ハ公弟種智ヲ云ハ般若石ハ之智

才五段

△甲衣 象語介冑執事者無退懦之氣非体純猛

△温故 温故而知新可以為師矣

△誣人 論語 默而識之學而不厭誣人不倦何有於我哉

△蘊蓋 詞 意行禪師ノ古文ニ如レノ類語アルト全文ハ見ス今ノ蘊蓋トハ

才六段

△緇事 論語 緇事 後素 注 先以粉地為質而後施五乘

△華嚴 四教後 弘初在寂滅道場現七寶莊嚴相

△擬誘彈陶 擬宜誘引彈河陶汰 世只弘教ノ次第ナリ

△平生心 仙怪 平生心是直 孟子 無恒產者無恒心 論語

△園里豆 禪錄 園里豆 危僧 注 無分曉之喻也

△驕毫額下 列子 夫珠在驕毫額下子遺其睛也 使其睛子當

才七段

△才之生 古者才之生也如木之生也如土之生也如石之生也

△丘乙巳 上大人 丘乙巳化之千七十子 伊呂波ナリ



△之線

八義記文之辨レセト云イ知フト云イ鐵ニ龍ニ云ル或ハ若碗沙鉢ノ類モ  
通語中ノ音語ト云リ三ツモカト訓スレシニ味線トハ後ノ物教義ナリ

△和歌所

和字ノ指南ハ三条冷泉ノ兩家ヨリ世々具時ノ文名ヲ撰ミ連奇ノ  
老本ハ里村ノ家ニ傳ハリテ或ハ是ヲ新在家氏ニ云リ

△不肖

史記堯知子丹朱之不肖不足授天下  
肖似也

△之會曉

彌勒下生經ニ初會ニ會ニ會ノ府度アリナ毫芒之會見曉トハ  
云ル云々

△解牛

解ニ云フ子ニ解牛段ハ文章ノ形容ヲ要トシ韓文ニ獲解  
解ハ文章ノ理論ヲ要トス早免ハ文章ノ性情ノニナリ

△之鳥琴

詩文聯句ニ鳥對アリ意對アリ向對字對ハ分論ニテ對  
法ナリ或ハ熊羆ニテ鳥獸ナル物アリ或ハ生植ニテ支休ナル物アリ  
世故ニテ子ヲ琴ケテナリ凡例トヒリキテハ文章撰大和聯句ナリ

△不根論

最話ニ東方朔牧羣以不根持論好談諧也武帝以詭佞  
幸之

才八段

△甘厚植

古詩ニ  
我輩之志  
のりらやまき  
あまのこ  
のりら

△新卷

古今序  
大傳のち  
あつらん  
のたの  
のりら

△怪力乱神

論語子不語怪力乱神  
解云世ニ同穴ノ狐ト云ル俗  
間ノ談ヲ四子ヲ形容セシナリ

△内前

詩話ニ樂天ハ常ニ詩ヲ作リテ内前ノ老彼等ニ向セシトアリ

△言行

論語子君子  
言行ノ偏ナラズ  
取言而過行  
或曰邦  
通危行  
言操  
解云儒  
家語孔子西家  
有愚夫  
不能識  
孔子  
是聖人  
乃曰

△東隣

老丘  
彼東京  
永丘  
吾知之  
矣云  
解云  
内前ノ  
老ト云イ  
多ハ東隣  
ト云イ  
老丘  
ト云ル  
總テ  
又對  
ノ為  
カラ  
作ス  
用ト  
通用  
アル  
世等  
ハ通  
用ノ  
用ヲ  
稱ス  
ル也

△儒仙

衡  
希遠  
在子  
序  
其意  
致  
吾夫  
子  
爭  
衡  
故  
其言  
多  
過  
當  
詔  
文  
謂  
牛  
好  
指  
解  
以  
木  
衡  
制  
之  
也

△下人

家語孔子  
撰行  
相事  
有喜  
色  
曰  
不  
曰  
樂  
以  
貴  
下  
又  
乎  
解云  
儒道  
ノ實  
トハ  
世  
事  
ニ  
レテ  
非  
語  
ノ詞  
ニ  
骨  
ヲ  
出  
ス  
ト  
云  
ナ  
リ

△愚心

佛坊  
二  
姬  
宮  
ヲ  
嫁  
シ  
テ  
始  
テ  
妻  
帯  
ノ  
念  
仙  
建  
立  
セ  
リ  
教  
行  
信  
証  
ニ  
或  
ハ  
改  
面  
儀  
ヲ  
賜  
テ  
姓  
名  
ヲ  
應  
テ  
交  
流  
ス  
ル  
也  
今  
有  
己  
非  
僧  
非  
俗  
是  
故  
以  
未  
ル  
子  
ヲ  
為  
姓  
解  
云  
非  
僧  
非  
俗  
而  
子  
實  
信  
ナ  
リ



△巽與言

論語巽與之言能無詭乎千級之為貴詭而不起吾

才九段

△南殿

解云南殿ハ林君庭ヲ指ナリ和朝云南殿ノ櫻ト云ル各モアリ北邱

△北邱

ハ墓所ヲ指スナリ洛陽城記山連亘四百余里東洛九原

△有心附

定家卿ノ詠ニモ此躰ヲ至極トナリ和奇ナ躰ノ中ノ一ニテ理世

△橋厚夢

解云此段ニ此ノ子ヲ指シテ文法ニ詔路斷續ト云イ句格

△俳諧之連歌

俳諧ハ真名勝ニテ長ク句ニ六七文字ノ配リモ宜カラズ

△一子一渡

最話序全詩一子一渡也或ハ杜甫馬詩瘦云

△騎鶴

上界一鏡腰纏十萬貫騎鶴遊揚州云

△鳥獸

論語九卷ノ子何莫之乎夫詩詩可以興可以觀可以怨可以

△穢嫌

阿含經穢嫌法穢嫌也穢嫌疑也

△刹那

仁王經一念中有九十刹那二刹那有五百生滅



△書室銘

白馬三銘論アリ志ハ有室ノ標題ヲ難スルトテ張子百子ヲ  
毛難シ程伊川ヲ毛難ス大既ホハニ及ノ趣アリ  
詩經七月在野八月在宇九月在戶十月蟋蟀入我牀下云

△蟋蟀法

解云州名ハ文三平ニ先後法ヲ彼章ノ結語ヲ起語ト知ナリ  
鬼谷先生ハ戰國ノ時ノ異人ナリ吳子孫子ハ兵法ノ師トシ

△鬼谷

張儀種秦ハ消稅旨ノ師トス其傳ハ六國史ニアリ  
一字不説 四十九年一字不説ノ語ハ禪録ニ多ク用イ

△一字不説

△賊後了

世語禪録ニ多シ本朝ノ諺ハ喧嘩ノ跡ノ捧ニ味ト云リ  
才十段

才十段

△法式

建治式ハ及相卿ノ作ニテ應云式ハ良基公ノ述ナリ是ヲ連歌  
ノ新田ト云フ慶安式ハ長頭九ノ作ニテ貞吉式ハ芭蕉翁ノ  
述ナリ是ヲ俳諧ノ新田ト云フ或ハ季吟ノ理木アリ或ハ立甫  
ノ噫州アリ大旨ハ世等ノ書ニ依レ座ノ設ハ東丈式ニ見ルナリ

△道藏法見

法書書ニ世等ノ類語アリ尚阿尋ハ全文  
論語君子不重則不威 松云尚可尋全文

△古人詞

△仙菩薩

大論仙ト菩薩ト羅敷ヲ隔カ知ク縁ニ元品ノ無明ヲ殘レテ淨度  
ノ為ニ衆生ニ縁ヲ引ト云リ解云オニ段ノ論ハ各人ト上手ト喻フ  
去六聖人ハ人ヲ説テ貴入収復者ハ利害ヲ説ニ己カ用リ辟ニ六孔子ト並  
子ト知レ然ハ詩歌ハ聖教ノ温和ヲ知リ俳諧ニハ覺曲ノ的當ヲ知ル  
温儒ノ二用也法ヲ知テ俳諧ハ殊ニ虚妄ノ用ナルヲ知レ世故ニシテ  
ニ應トハ觀自在ノ化相ヲ以テ道ニ勸懲ノ方便ヲ知レトナリ

△君子射

論語指讓而所下而飲其彘也君子

△論語精

抑堂篇篇高不厭精贈不厭細解云白馬文三章訓ニ不厭ニ子  
ヲ稱シテ朱注ニ養人宜人トハ食物本物ノ注ニシテ聖人ノ夜話ニハ  
食過タラントヲ誠ヤ州ニ句ヲ起語トシテナセ句ハ飲食ノ内ナリ  
二擇擇ノ文三章ナカラシマ夫ニ腹中ノ物好ミナラハ人ノ向居ト云ヘケ  
ト不厭ノ詞ニ文三章ヲ尺セルニ論語ノ雅俗ヲ知リ多ニ孔子ノ虚家  
ヲ知ラハ多ニ文三章ハ先ニテ教誡ハ後ナルヲモ知テ家ニ儒俗ノ差別ヲ知レ

△子成

論語棘子成曰君子質而已矣何以文為子貝曰文猶質也質猶文也  
解云世ニ以ハ有限物トスル論語ニ適無自量不及亂意ニテ有限モ  
無量モ例ノ文三章ナリ或ハ徒然州ノ下戸ナリ又ト云ハ世類ナリ

△文亦良若



溫厲夏

論語子張曰君子有三變望之儼然即之也溫聽其言也

哀樂頌

似名トウ又ヲ十論ノ節ト知レ本ヨリ解語ノ遊藝ナル和同ニ流レ

鳥車

解云鳥車馬ノ子ハ相似ノ物ヲ云ヘリ然レ元禄ノ中稿ニ一丁ノ字ヲト

一大

虛 禪語一大吹虚チ夫傳アッ私云此喻ハ何道ノ論ナリ

三言

論語邦無道危行言孫 佳孫ハ頃也 在子ニ寓言ナリ九重ノ言ナリ七

標月

圓覺經後多羅教加標月指 若復見月了知 此四ハ文忠ニテ本トシテ 行信ニ其用ト知レ文ハ行ニ和テ其ハ信ニ

四教

嚴ル故ナリ夫忠トハ何シ文武ナリ文武ハ孔門ノ二事ナラス誠論語

理即

止觀ニ理即ハ各字觀行相似ハ分身宛竟解云此各ヲ天台ノ六即

本立道生

論語 君子務本本立而道生

醋吸

此圖ハ孔克釈ノ之聖ナリ一即為レト之即為レ一法味喻ヲ圖セル

默識

記也ノ義ヲ用イ默識心通ニ知也ノ義ヲ用ニ多ニ两用トスレ

春秋

朝會傳孔子曰知我者其惟春秋乎罪我者其惟春秋乎

楞伽

楞伽ニ可レ以レ心ヲ解云此一對ヲ指シテ評者ノ口訣ト成セル義ニ

一論

四一

何法ニ及子ハ釈如ノ法也モ孔子ノ論語モ勸懲ノ理ハ同レレ  
多ト成リテ道ニ世出世ノ本懷ヲ失ヘリ然レハ之道ハ一教ニ  
ノ錯ヲ傳テテ果ハ儒仏ノ論ト成リ又獅子身中ノ虫トハ此喻ナリ  
次ニ法ヲ各ヲ覺レ終ニ是後ノ樂ヲ知レ釈ニ初發心時辨成正覺ト  
ハ云レリ



△始字終言

論云論語始字而詞アリテ中ニ詩書孔子ノ文ト覽ラシ  
論終ハ今日ノ言語ヲ知ラズニ世法ノ實子ト云フ

△四而八十章

解云此等ノ文法ハ全篇ニ數多ク下ニ及ニ  
長短ノ文ヲ調ヘス本ヨリ句對字對ニ兼ス

△五而四十函

對ノ法氏亦別ナリ是ヲ意對ノ格ト知レ  
對ノ法氏亦別ナリ是ヲ意對ノ格ト知レ

△阿難

大論ニ竹林精舍ノ西南角鉢四維穴出ニテ  
結佳ホス阿難

△有若

此故ニ知是我前ノ發語ヲ重テリト  
論語朱序程子曰論語

ノ設ニリ叙四孔子ハ其道ノ徳ヲ慎ミ阿難曾參ハ其道ノ化ヲ擴テ始テ儒ノ法  
ヲ定ム然レバ道ハ文章ニ差別シテ内ノ人ノ文實ニ依キテ外ノ人ノ録儒ノ  
篇備モル也家ハ處ニテ子トテ急ニテ成律ヲ破スレハ虛實自在ニテ道  
實ノ儒ノ内ハ莊周ヲ諫臣トセシ悟ニテ仁ヲ求ラズセシハ虛實不自在ニテ道  
狹シ去レテ成リ味方ト成ル軍法ノ家ノ大支ナリ漢ノ韓信ニ我侯ツルハ  
口テ曾參ヲ用タル實仁ヲ知レ孔子ハ百世ノ聖人ニシテ四絶ノ大道ニ自在  
ナレハ異端ヲ改ルハ害ナリト宣然レ論語ヲ讀ムノ人ハ及テ讀ムヤト論語  
ノ注者ノ口々ニ誤タル者多シ云ヘリ誠ヤ内ノ人ノ結集ヨリ後世ノ注者多ク  
テ其師ノ言語ノ重テ悟ラス其書ノ文字ノ表シ習ヒテ已方直ヲ撰録スレ故ニ  
多クハ異端倒ノ誤ナリ此評ハ十論ノ秘訣ニシテ實ニ評者ヲ誘同ス

△魯頌詩

論語詩ニ詩ニ而一古以テ之ヲ教フ之曰田心與邪  
魯頌詩也八代集

△浮橋詞

神ノ穴塘ノ詞ナリ解云此一對ハ諸書ヲ鑽綜シテ詩ニ孔子ノ詞  
ヲ合ヒテ奇ニ貴ク之ヲ序ラ假リテ和漢ノ向雅ヲ結スレ是ヲ文對法ト和

△木鐸

論語天將以夫子爲木鐸也夏書ニ道人以木鐸徇干路也  
宣公之官也解云之福本ノ州橋ニ木鐸ニ信訓アリ夫子久失  
位トノ説ハ削リ自ニ按排ナリ孔子ヲ令官ノ下品ニ啗タル一尊ヲ意地  
コソ凡雅ナレト云リ此等ハ文章ノ虛實ナルヤ論語ノ諸注ヲ見合スレ

△龍樹

解云天竺ニ馬鳴龍樹ト云ク無著天親ト云レバ四菩薩ハ向ヒモ  
化經ノ大論師ナリ然ルヲ評者自ノ論有テ指シテ佛語ノ令官ニハ  
喻フヘケト龍樹ハ削リ過當ナル今ハ菩薩號ヲ取置テト云レハ多  
ニ過猶有テ辨初ヲ知リ多ニ佛語ノ誤ヲ知ラハ過當ハ削リ佛語ノ令官ニハ  
誠ニ十論ノ惣評ニテ佛經ニ木鐸ノ虛ヲ扱イ佛書ニ龍樹ノ實見ヲ  
顯ス云々佛儒ノ證文ニテ一奇ノ結語トハ云キナリ





京寺町押小路橘屋

野田治兵衛



